

沈周と文徵明の師弟関係について —画風の受容と文人画家の系譜形成の観点から

九州大学大学院・人文科学研究院 助教 都甲さやか

15, 6 世紀呉派文人画壇の中心人物である文徵明(1470-1559)は、沈周(1427-1509)に画を学んだ。両者は、明末の董其昌(1555-1636)が提唱し、後の東洋美術史に多大な影響を及ぼした「南北二宗論」の文人画家の系譜に名を連ねたことで、その師弟関係についても広く知られるところとなった。しかし具体的に、文徵明が沈周から何を学んだのか、その実態については未だ十分な考察がなされていない。本発表では、文字史料の確認と作品の比較検討を通して、早期の文徵明が、沈周の教えのもとでどのように画をなすうえでの技と意識を得ていったかを明らかにする。それによって、文徵明は沈周の画と教えの中から、自身の画風のみならず、文人画家としての自身の歴史的位置を見出したことを指摘し、文人画家・文徵明を考えるうえでの沈周の重要性を新たな視点から述べる。

文徵明が沈周に師事したのは、概ね弟子となった弘治 2 年(1489)20 歳の時から、沈周没年の正徳 4 年(1509 年)40 歳までと推察される。まず文徵明のこの時期の作品と、沈周に関する言及をもとに、指導の実態と沈周画からの学習成果を考察する。文徵明の言によれば、沈周は画をなすうえで肝要なのは自身の内面の徳を表すことと述べていたといい、こうした文人画家としての制作態度は、以後文徵明の画業に大きく作用していく。また文徵明は、《雨余春樹図》(正徳 2 年【1507】、台北故宫博物院蔵)等にみられるように、早期から淡緑と青緑による着彩を作品に取り入れ、自己様式として発展させてゆく。その背景には《九段錦図冊》(京都国立博物館蔵)のような、沈周の着彩画受容があったととらえられる。今日みられる沈周の画風は、細筆による着彩の小作品、簡略な筆による大幅の墨画など様々であるが、このことは当時の文徵明が、多彩な沈周画を実見しながら、自身にとって好ましい画風を選びとっていったことを窺わせる。

次に古画学習という観点から、沈周の果たした役割を指摘したい。收藏家であった沈周を通じて、文徵明は様々な古画を実見し、画風を学び、自身の作品に取り入れていった。更に沈周の、元末の黄公望や王蒙といった文人画家に対する評価を参考に、自身の追従すべき画家を見出していったと考えられる。また文字史料によれば、沈周は、南唐の董源、北宋の巨然に連なる画家として元の呉鎮をとらえ、さらにその流れに自らを位置づけていたようである。こうした沈周の画家の系譜への思いが、文徵明にも、自身の連なるべき系譜を念頭におきながら、画をなすことを促したのではないだろうか。1530 年代の文徵明は、自身の系譜に意識を向けつつ、古画の図様を自身の画風で再構成した作品を少なからず制作する。その中で、嘉靖 10 年(1531)に完成した《松壑飛泉図》(台北故宫博物院蔵)の絵画表現には、王蒙と沈周への意識を指摘できる。このことから文徵明は、沈周を介して過去の画家との連なりを見出し、その一連の系譜を絵画表現においても表明しようとしていたと考えられるのである。

董其昌の「南北二宗論」については、系譜に位置づけられた画家の偏り、具体的な繋がり不明瞭さが既に指摘されてきたが、本考察はこうした問題を考えるための一助となるであろう。即ち、実質の師弟関係が認められるのは沈周、文徵明の二者間においてのみであり、またその実態が、画技の受容と、文人画家としての系譜意識であることを指摘したい。